

Title	新出聖徳太子伝二種：承前
Sub Title	
Author	牧野, 和夫(Makino, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1989
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.24 (1989. ) ,p.421- 449
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000024-0421">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000024-0421</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新出聖徳太子伝二種——承前——

牧 野 和 夫

ここに本論集二十輯（昭和五十九・三刊）にひき続き、紹介する聖徳太子伝記二種は、後半のみ存する零本並びに有欠の端本であるが、中世の聖徳太子信仰の隆盛に伴う膨大な量の太子伝記・注釈書の出現を示す有力な資料である。

両書の書誌的事項を記すならば、

一、久遠寺身延文庫蔵

〔太子伝〕 附上宮皇太子菩薩伝

〔室町〕写

大一冊

楮紙後補表紙（二七・八×十九・八糎）、中央鉛筆にて「雜一ノ内／太子伝ノ内古写」と。右下隅に「日遷」と墨署名あり。前欠と覚しく本文初行は唐突に「□□□□宣時也又云清且トモ也或〔虫喰〕  
〔虫〕  
説ハ平且亦云午時ニ仍兩説也但□□時正義歟」と始まる。無

辺無界、字面高さ約二六・〇糎、八行々二十五字内外、楮紙（二七・八×一六・一糎）両面書、本文料紙の天地並びに左端に補強の紙（幅三・五糎）を継ぎ、所々補写・なぞり書など多し。十丁裏迄は〔室町〕書写のもの、十一丁表よりは料紙を異にし（補強の紙を継ぐ頃のものか）ており、〔室町・近世初〕頃の書写である。十丁裏までは、本文同筆墨にて、清濁声点、レ点（中央）、一点、訓み仮名・送り仮名等を附す。八丁表、本文四行分あり、次行に「本云康永二年未二月廿四日 伝受沙門雄慶」と記す。次行以下三行分に蓮牌型墨印（六・七×一・九糎）「身延文庫」と。次いで、「上宮皇太子菩薩伝（隔）  
天台沙門釈思宅撰／唐是末州相色。県姓ハ范大池村ノ人三生之間

碑文現在之「昔陳朝ニ有ノ」と始まり、十丁裏八行目を以て了る。次丁から補紙後筆墨書あり、十一丁裏にも前出の「身延文庫」印あり、十二丁表より「本国詠歌始日本記云」と小題して十二丁裏まで室町末近世初頃の後筆墨書。

「太子伝」の内容は、その末に、

「太子伝記秘抄授弟子語云 南無三国伝燈

大導師上宮太子承授

灌頂仏子某敬持三返

種々供物ホ可在之云々 面授口決能々守機伝之一 血脈ホ別在之」

とある如く、「太子灌頂伝」と関わる貴重な一書であり、本集二十輯に紹介した久遠寺身延文庫蔵『聖徳法王三國伝燈灌頂伝』〔室町〕写大一冊の後欠の部分に該当しうる内容である（書風・原装訂など両書には相近いものがある。ツレかどうかは、後考を期す）。同じく二十輯に収めた野中寺蔵『上宮太子御遺記注』が、「四天王寺」絵所上座」と係わり、「伝絵」（絵解き）に密接な「秘事」を伝える点と併せて、寺院と太子伝相承の「しくみ」を商量するに資するところ多大な資料である（家蔵〔近世〕写『上宮太子御遺言記』大一冊は、追記に「初重」から「五重」

に及ぶ「五重相承」の内容が記されて詳細である。しかし、正徳三年における法隆寺での伝授の旨存し、中世に遡りえない点を憾みとする。早稲田大学図書館蔵教林文庫本と共に紹介予定）。おそらくは、光久寺並びに聞名寺蔵『正法輪蔵』の秘事」「大秘事」などにも同様の相承型態に基く血脈授受が予想される（但し、いわゆる文保本と係わること深い「土庫ノ能登房」の太子伝が「今伝ノ灌頂ト本枕ヲタカトリテ人ニ相伝」、「手継証文ヲ糺」ことなかつた点は、考慮せねばならないであろう）。「灌頂」という寺院における「システム」の刻印された「灌頂伝」の「現われ」のひとつとして、当該「太子伝」は大いに尊重されるべきであり、本奥書に認められる「康永二年（二三四三）」伝受の記は、こうした「灌頂」の「しくみ」と内容が鎌倉期に溯りうることを証するものである。既に金沢文庫蔵『上宮菩薩秘伝』や同文庫蔵古文書類からの検討が林幹弥氏の手によってなされているが、近く阿部泰郎氏に「中世聖徳太子伝『正法輪蔵』の構造」もある。家蔵『法隆寺舍利相伝』一軸によれば、「惣持——覚禪」等を経た血脈相承の特異な内容を伝えており、「太子灌頂伝」に絡む「秀範」の口伝も見える（室生での伝授を伝え、称名寺釵阿（？）の名も見える。律僧忍空を

めぐる「如意宝珠」と「南無仏」の「舍利」、室生山をめぐる

『御遺告』と宝珠——注釈・秘事・口伝——、これらが今後の課題である。太子伝の「灌頂秘伝」の奇怪な内容と想外な広

がりには驚かされるのである（『法隆寺舍利相承』は別に影印紹介予定）。その注釈の質・内容について一言つけ加える。この

『太子伝』に伺われるように、秘事・口伝相承という「可秘」灌頂「伝」の内容は、概ね、朗詠集の注釈や百詠の注などに

抛る「幼学」的世界であり、古今和歌集注釈類の切りとり・弥縫である。「幼学」的世界を「幼」という概念に強くひきつけ

る余り、従来の研究は、寺院僧坊の「文物」集散の「しくみ」を看過し来たのであり、逸するもの又甚だ大であったのである。

なお、『上宮皇太子菩薩伝』については、飯田瑞穂氏の諸論考に譲る。御参照願いたい。

### 一、慶応義塾図書館蔵

上宮救世大聖御伝存巻下

〔室町後期〕写

大一冊

墨色後補表紙（二七・〇×一八・二糎）、見返し後補。内題

並びに本文初行「上宮救世大聖御伝下／十九才 十一月七日太

子深□御出家／御志有御門崇／峻天皇ニ此由ヲ…」。無辺無界、

字面高さ約二三・八糎、每半葉八行々二十二字内外字数不等、

漢字交り片仮名。本文は二十四丁表を以て了り、丁を改めて

「舍利礼／一心頂礼…以下五行にわたる式文あり。本文同筆の墨書である。終丁裏左下に「月明荘」の小朱印がある。

『大聖御伝』の内容は、二丁表に「廿歳廿一歳 廿二歳」とし、三丁表に「廿三歳 廿四歳 廿五歳」として各々廿二歳・

廿五歳の内容のみを記す如く、太子伝からの抜書であり、しかも梗概風の省筆ぶりは甚しく、誠に片々たるものである。下着

が十九才から四十九才並びに滅後を二十四丁に収めることから判断し、上巻は誕生以前から十八才までをほど同様にして録す

るものか。太子毎歳に豊かな記事を設ける太子伝記に比して簡略この上ないものであるが、廿七歳芹摘后や黒駒のこと、三十

五歳の達磨の化身の蛙の唄師代替のこと、三十六歳の小野妹子衡山に渡ること、四十歳の乞食との歌問答のことなどは、詳細

を記して憚るところがない。珍しい内容や興味深い内容のもの（その判断の基準は明確にし難い。秘事などとの関係にも注意

を要する）のみを筆録した、一種の「抜書」である。他に、室町期の抜書としては彰考館蔵『太子伝抜書』を知るが、「太子

伝」流布の一型態としての「抜書」が、今後、更に報告されることを期待するものである。

\*

本稿の成るに際して、閲覧・翻字を御快諾下さいました久遠寺身延文庫・慶応義塾図書館各位に対し厚く御礼申し上げます。

凡例

一、ここに翻字するものは、次の二本である。

『太子伝』附上宮皇太子菩薩伝』

〔室町〕写 大一冊 久遠寺身延文庫蔵

『上宮救世大聖御伝』存巻下

〔室町〕写 大一冊 慶応義塾図書館蔵

一、翻字に当り、次のような方針に従った。

1、漢字はなるべく正字体を使用するが、適宜、別字体、略字体をも併用する。清濁声点は除くこともある。

2、虫損等による判読不明箇所は、□で示す。

3、各丁の終りは「一・オ・」一・ウの如くに示す。

又、改行は、本文の行どりに従うが、制約上、本文一行は翻字文二行にわたる場合が多い。

4、『太子伝』には、貼紙補写の部分あり、\*1・\*2として後に一括して注記する。

身延文庫蔵 〔室町〕写『太子伝』 大一冊

□□□<sup>〔寅〕</sup>宣時也又云清。且<sup>トモ</sup>也 或説ニハ平且亦云午

時<sup>ニ</sup>仍兩説也但

□時正義歟 合掌向東ト云ハ東方ハ方始也是表法興

始<sup>ト</sup>

□□<sup>〔心カ〕</sup>也法花ノ時可開初住无生ノ悟故迹門ニ東方光照

思之<sup>ニ</sup>又表

□心寂初ナル事<sup>ヲ</sup>也是則太子受生於和国ニ施化於濁世

事為令衆生

□□者心<sup>セ</sup>次勸行業<sup>ニ</sup>為令証并涅槃ノ義故也

一義云太子生

和国ニ事西方本師ノ名号ヲ東土日本ノ衆生<sup>ニ</sup>勸唱ヘシメテ令

往生極樂<sup>ニ</sup>

給<sup>シ</sup>為本懐<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>向東方<sup>ニ</sup>弥陀ノ名号ヲ弘給也太子御一代

大綱<sup>ノ</sup>念仏□□<sup>シ</sup>

為<sup>ス</sup>素懐<sup>ニ</sup>也故<sup>ニ</sup>唱<sup>シ</sup>一称南無仏<sup>ニ</sup>再拜<sup>シ</sup>玉ヘルハ弥陀ノ名号也

此事後鳥羽院御字「一・オ」

\*2 法然上人。開成皇子、草創摂州勝尾寺參詣。帰京之後

\*3 同院被書写供養一切經被送彼寺へ是、供養導師、安居

院聖

\*4 覚法印也供養言云。聖徳太子唱南无仏、慳雖不顯其

名

\*5 心弥陀、名号也、先賢詞定有其致、足歟尤。為支証、ト云々

\*6 一義云仏法興隆、取初故先帰三宝、惣躰、顯玉歟仏、者三

世十方、本仏迹仏

\*7 等通号、云々若重々南無三宝、可唱給、何限南無仏、耶

答

\*8 仍仏昔、帰三宝、惣躰、具足スル也其故、仏ト云ハ能証之覚

躰法ト云ハ所

□□僧云利他、応用也依之帰仏、覚躰、内証外用、功德悉

具足也「一・ウ」

□□無仏、云ヘル帰三宝也其例証多之

□南無仏者尺迦、名号也尺尊一代、教法、和国、為弘通

之故一代教主、名

号、先唱給也仏舍利、御字開玉ヘル尤有所以歟松子伝其証

也

一、義尺迦弥陀、名号也今平氏伝、称南無仏ト再拜スト云

へリ余伝、意、称南

無仏々々々再拜スト書案、其意、太子仏法興隆、取初

先一代教主、名号、唱

帰命、次、本師弥陀、名号、唱、帰命、再拜スト云ハ各一礼、成

給歟、云々尺迦如慈

父。弥陀如悲母。如此義者尺迦、云証弥陀、云証共無

相違也

一義云薬師、名号也元興寺本紀舍利伝云拳、手、於舍利

即唱薬師、宝号「文」ニ・オ

伝教大師造作礼拝文云南無ヒルサナ亦名尺迦牟尼像法

転時救衆生故

薬師玉(ルリ)光仏、凡此等義、衆生随類各得解、道理ナレハ大

聖、善巧何各

相叶聖意不可有相違歟

再拜礼ニスルニハ三宝ニテ致

三礼ニ三身ノ功德ヲ恭

敬スル義也神明ヲ拜スルニハ致再拜ニ本地垂迹ヲ躡テ恭敬スル

義也貴人ヲ

敬ニハ用一礼ニ當時ノ威徳ヲ敬故ト云事常途義也今再拜ノ心

如何

一義外儀順神国ノ風儀ニ内ニハ帰三宝ノ惣表歟 一義云

唱尺迦弥陀

〔各〕用一礼ニ歟但帰仏用一礼ニ事一礼ニ帰三宝ノ意ヲ撰

歟

〔寺〕ニハ南無仏ト三度唱テ礼拜云々ニウ

〔利事或説云御手ノ中ヨリ出一粒仏舍利ノ障子伝云右ノ御

手出仏舍利

〔開右拳ニ合掌ノ称南無仏ニ出仏舍利ニ或説云其ノ御手

ヨリ出三粒舍利

或開左手ニ合掌即出三粒仏舍利ノ光明赫奕タリ但右拳

開出〔仏〕

舍利一粒ニ相伝義也 右ニキリノ手ト云事俗言可思之

百濟寺縁

起云太子曰我ノ悲母ノ胎内ニノ拳ニ尺尊ノ舍利ニ生我國ニ以

降自建四十六箇之

伽藍ニ崇仏經ニ度僧尼ニテ文或説云此仏舍利ノ昔勝万夫人

タリシ時御父

波斯匿王ヨリ讓得給ヘル御舍利也天竺ニノ卅余歳恭敬供養

之後任ニ願力ニ

百濟国ニ来生シ時此御舍利ノ御身不離下ハ今日本マテモ

云々 此御舍利ノ尺尊ニ三ノオ

右ノ眼睛ノ御舍利也左ノ眼睛ノ御舍利ノ留天竺ニ右ノ眼睛ノ御

舍利留日本

故ニ天竺ヲハ名月氏ニ和国ヲハ名日域ニ日月ニ二徳ヲ天竺和

国ニツカサトル事甚

深ノ子細ニ在之叡秘ニ相伝甚深ニ是ノ眼睛ノ御舍利ノ高

姓ハラ門三石ノ御舎

利天ノ石人ニ石竜ニ石分ニ時舛ノ尻ニ三粒ヲ付我分トセシ今南

無仏御

舍利是也法隆寺奉安置之、搦扶桑記六局伝日次伝、説也

或説ニハ

天王寺在之或説云天王寺御舍利元十三粒御坐ケルカ十

一合成一仍三粒在之也

〔或〕説ニハ天王寺御建立之時金剛參開右手奉御舍利

。物語在之今天王寺御舍利是也

□也後此態永止文七歳二月ヨリ焼香献花正経論御披見

アリテ先天下」三・ウ

□月六斉日、敎生禁断事御奏聞依之勅許是我朝衆

生捨惡持善

源也故合掌御クセハ仏法弘通御祈念也七歳ヨリ正

仏法利生給故此態永止ト云也

法興元世事 欽明十三年、仏像等不崇敬之剩難波、堀

江、抛捨故非法

興一歟仍四月能言能語ト云ハ法興、相良也 但延曆寺僧

禪岑。記云

欽明天皇以前第廿七代繼躰天皇即位十六年壬寅春正月

漢人安部村

主司馬達即結草堂於大和国高市郡坂田原安置本尊

。依。拜ス

拳世而皆云大唐神ト雖然遂広不流布矣如此記者

繼躰天皇御

字法興元世聞タリ。或説云如来滅後一百余年中天竺

广竭阇国」四・オ

俱菴摩城有育王収仏舍利役使鬼神ヲ起八万四千宝

塔、遍満閻

浮提内之故和漢普有此宝塔而震旦ニハ奏始皇焼詩書

百家之典籍

埋儒士四百六十人之時彼育王塔当此時隱没スト云ヘ

リ同帝時外

国沙門釈利防等十八人賢者将来仏経ヲ献始皇ニ々

々不信受之剩

彼利防等禁獄スルニ夜有金剛丈六人來破獄出之



始皇驚怖、稽首

礼謝、雖尔、遂以不及興行、文此等、意設雖不及興行、是非法興世乎


<sup>\*10</sup> 旧記。尔トモ何レモ教機、不相応時、王臣共不信受、無流布之上、今

興、道理、王臣共信受、世人同、修行スル是、法興、元世ト云也故、漢朝ニハ明帝「四・ウ

<sup>\*11</sup> 敏達此御代、法興元世ト可云也、一和漢兩朝、仏法弘通、偏依合利、威驗□

<sup>\*12</sup> 昔周成王。時三月三日、周公旦桃花賞翫、曲水宴被始行、事云々

周文王「武王」成王、或説云漢朝。関。山ト云山頂スコシクホキ所ヨリ水流□<sup>出</sup>タリ

此水岩カトニサヘラレテ形成、巴、字、次才流下、興、増所也依之、君臣

於彼所ニ桃花并、鸚鵡、坏水、ウカメテ作詩、増興酒宴アリ、故曲水、マカレルミツ

宴、名ク桃花仙薬、用故桃花、宴トモ云伝タリ

或説云周文王、御子周公旦、賢才無双、人也、巴、川、没山ト云所ヨリ水流、出テ、

三通、クタル水、形如巴、字、此曲水、邊ニノ公旦被レ始、宴、故云曲水宴、云々、五・オ

或説云巴、州ト云国、山アリ、巴山ト云山、峽、水流タリ、三メクリノクタル巴ト云

文字、似タリ、周成王、伯父周公旦、世政、納給、故、三月三日、上、巳、日、当

洛陽、宮居、巴、峽、水、ウツシテ、山水、ツクリ岸、桃、ウヘテ、盃、鸚鵡ト云

鳥、形、作、此水、ウカメテ、詩、ツクリテ、坏、流下ルニ、我、前、トホル、時、詩、作出シタル

者、坏、取、酒、飲、不作得、者、空、不得取、坏、云々、楽天詩云、水成巴、字、初

三日、源起、周年、ヨリ、後、幾、霜、或、礙、石、遅、来、レハ、心、潜、カニ、待、牽、レテ、流、過、レハ、手、先、遮

此詩、意、坏、流、下、有

様石、サワリテハ遅、来、故詩、作マウケタル人、早我前、

来カント心ヒソカニ待也坏」五・ウ

流、ハヤキニ引カレテ早、スクル時詩未、作、出、人、手先

サヘキル也

或説云秦、昭王以三月、上、巳、置、酒、於、河、曲、有、金

人飲之、後世皆用三月三

曰、詩云春来テハ遍、是、桃、花、水、ナレハ、桃、花、水、者、晋、世

武陵ト云人三月

三日行遊山河、桃、花、浮、水、流、下、其、色、艶、々、ト、河、流、皆、紅、

色ナリ武陵見之謂ヘリ

寄麗ト從河、岸、尋行桃花多、開タル是アリ是仙家也遂

臨、宮、檻、杖、ニ、斧、ヲ

立止二仙、困、碁、ウツヲミル其間食時斗、思ヘリ或説半日欲出

里ニ斧即

朽、仙、人、垂、テ、哀、教、出、之、親、子、共、無、遇、七、世、孫、仙、源

桃源桃家

桃花宴曲水宴事 本朝ニハ人皇第廿二代雄略天皇元

年三月上巳」六・オ

幸後蘭ニ而為曲水之宴、群臣称万歳、同廿四代顯宗天

皇、御宇

被行之、其後敏達天皇御宇被行之、和漢中絶多之

六十年代、帝延喜聖代、被行之、時菅丞相被書序、其御詩詞

云

春之暮月々之三朝天醉于花桃李盛也我君一日之澤万機

之余

曲水雖叵、遺書雖絶、書巴字而知地勢思魏文以翫風流盖

志之所

謹上小序文 凡桃花宴、延、年、齡、不、祥、公、私、祈、也

云々

吾兒何謂、文、事、兒、ト、云、ハ、太、子、御、事、也、太、子、幼、稚、時、御

名、阿、兒、ナ、リ、是

阿兒トヨム人モ在之、阿兒トヨム人モ在之、阿兒名義

甚深云々」六・ウ

桃花、一旦之榮物。是色アル者、皆生死流轉、因縁ナル故、未  
来カ、ミテ色。

イマシメ給也。松葉百年之貞木也。云者トキハ木  
ナル故、仏界常住ナルヲ

賞給義也。桃花延齡、功能有リト云ヘトモ有為、法也皆  
終無常歸。

仙家生死内也不可遁死。松葉ミトリノ色カワラサル  
事、仏界常住ノ

覺躰所表ナルヘシ。樂天云十八公榮霜後露一千年色雪中  
深文

昔丁周ト云者夢腹上松生タリトミル自ラ合セテ云ク  
松ト云文字、十八公トカケリ

我今十八年アリテ三公位、イタルヘキ夢也。三公者  
大臣位也

如案、經十八年登三公位。  
松名大夫、事奏始皇狩泰山之時ニワカニ村雨アリ松下  
入雨難去。

感其德、被授五品位、被号五大夫了。或説ハ松五

本下也仍号五

大夫、実ハ各大夫位也。五品トハ五位也

万歳樂太子卅一歳壬申自吳国来味摩師ト云、樂人日域伝妓樂  
之舞吾朝之樂始也

无常太子卅七歳戊戌正月自近江守献人魚瑞物太子無常遷  
化變由奏

天皇同年夏五月書写大般若經  
或伝云妃者二月廿一日辛巳一定也入滅御年  
卅六同廿二日或戊戌夜半太子

入滅一定  
己辛歲  
冬十二月廿二日太子御入滅云々。日繼伝辛巳歲太子后一度  
二月一夜半

御入滅、実也。太子  
五十五蘇我大臣者御入滅七年戊戌六月朔日卒  
或丙戌五月死。

太子伝記秘抄授第子語云、南無三國伝灯大導師上宮  
太子承授

灌頂仏子某敬持三返  
種々供物等可在之。云々面授口決能々守機伝之、血脉

等別在之

本云 康永二年未关三月廿四日 伝受沙門雄慶

「身延文庫（蓮牌型墨印）」

上宮皇太子菩薩伝 天台沙門釋思宅撰

唐是末州相邑。具姓 范大池村 人三生之間碑文現在之

昔陳朝有「八・オ

南岳惠思禪師者亦說大隋。思禪師ヒヒ思盖一人也謂陳隋二

国□

□也其南岳即陳之土境也隋 高祖令第二子漢王ヲ領四

十万衆ヲ

平陳入隋ニ即說隋 南岳山思禪師ト其 南岳 靈応甚

多 百嶺相□〔限〕カ

千巖。盤。鬱タリ楨松仙マ、ヒ柱豆嶺ヲ侵マ、ヒ靈ヲ其嶺崇迥人莫窺

尋コト

□〔五〕ノセム通 僂 府十仙窟。宅。儒。生輻。湊。玄。侶如雲。集。常ニ

有五千僧。修道

□〔多〕並 頭陁苦行。坐禪誦經。或。口宣三藏。心味ハフ四

禪。振錫。納衣。携□

拋鉢。或。冬夏。祖。膊カタクキ。跣ハタシ。足。經行。或。隱居。巖穴ニ。喰

松。噉。栢ヲ。或常

堅不臥。宴默。夷真マ、ヒ。ナリ。各檀ホシキマ、ヒ。已。能。俱求会コトヲ。理ニ。其

山。間有二十里松徑ハ・ウ

有一。異人。守護此山。若惡人入山。懷フモフ。劫奪セム。者至レハ

松。徑。異人即出。投手

牽入松林谿中。ニ。口言。汝過去無量劫。中。作惡業。今日

坐禪入滅尽定以

□手ヲ。投石。膝脚フツフアシノ。上ニ。更不起ヲキダトヒ。假令凡二十余人。拳彼

一手。之石不能得動

□〔以カ〕次形貞与凡。無別亦栖泊スム。処。若有惡人。即現。无。惡人。不

現。時共目。為大

梓渴。其山中。有千年梨樹。若。発花。結果。即有。聖人。心

生於一時梨

樹。生花。結果。其思禪師來彼山修道。即自豎一石。記之

余一生來此

迄イタル耆年墜フトシ齡捨壽遷形後其樹又發花テ結實又豎一

石ヲ記自云余

第三生於此間修道在後即云余今往東方无仏法処

化人度物九・オ

至今唐朝時人皆云往南岳觀思禪師三生石ヲ其樹唐

開元年中

發花結菓至天寶八年有住檜和上久在彼山修道

其年造大

講堂忽催造早即都人會山中僧等設大齋於慶堂其住

松

和上至堂礼仏早合掌東西着ミソナハスコト衆僧ヲ早即テ歸房齋

了用楊枝

廻頭〔竟カ〕向崑崙ニ近云我婆藹去テ哭崑崙ニ噉死テ作婆

藹即報

告堂中諸僧ニ用楊枝早便住堂中ニ諸拳悲哀ス從此衆

僧始ヲ□

住松和上ニ思スト千梨ニ也思大和上ハ即在テ靈山ニ聽シ法花

經ヲ僧也然靈山ニ

聞〔同カ〕聽法花有思禪師在南岳山智者ハ在ニ荊州玉泉寺

定光禪師〔九・ウ〕

在天台花的峯然此三人各異ナリ於時思禪師威〔マシ〕綾最甚

定光禪師□

耳零タレリ天蓋智者目有重瞳思禪師後生ニ日本国橘豊

日天皇宮

生度人出家人皆不從即云奴等不能捨離眷屬太子

云汝出家セハ

与汝高位大祿不制姓房自是已來出家スル衆甚多漸

後制以三婦

五八戒等ヲ是知〔善薩〕方便善巧多方ニ經云先以欲釣〔マ〕

牽後令人〔云々〕入〔云々〕仏道

次發使往南岳取先世持誦法花經七卷一部一卷

成小書沈香〔云々〕

盛〔云々〕至即作疏四卷ニ釈經又作維摩經疏三卷勝鬘經疏一

卷於是

亦窮智鏡〔跡カ〕文飾レリ鳥章心璧玄律研幾秘術發揮名  
教曠千古一〇・オ

未開照晋礼客瞻百王而有裕遂得宝偈西從爰開  
石室之闕

金牒東流逸竜宮之海蔵又講件疏香風四至起花雨  
依罪

一纒歌流輝泛濺於是法花経創伝日本菩薩兼入禪  
定或時一日三日五日干時世人不識禪定但言太子入コト

夢堂制ルニ以白

一進食ヲ先造大宮大寺為弓削大連起乱於摂津国

造四天寺

一出人出家而弓削殞大祢克寧又造法隆寺及皇后宮

又造

一妙安寺及般若寺ヲ造僧寺三造尼寺五合八所ナリ

又記言

一近テ一歳ニ當有伝持戒律大興律儀峻峻ナラン是

知ク一十・ウ

太子竜楼不御鵲駕長飛乘劣仙ヲ面

仙ト赴而鼻ラン妙覺矣

「身延文庫」(蓮牌型墨印) 一一・オ

本国詠歌始日本記云

第一歌云 天津姫美度乃謨唄勢志今耶荒振神始奈流

覽

第二歌云 天津姫御嫁勢志今日耶荒振神始覽

第三歌云 烏羽玉乃吾黒髮毛不乱結定世夜波乃手

枕

此歌者氣長足玆司尊安田玉由利姫夫妻安田玉由利姫

尊乃

余御貞目出無類御生於弟生馬武見尊御婦奉

歌是也

第四歌云 素佐乃尾尊於出雲国御配所詠歌云

雲八重垣妻籠天八重作蘭乃八重垣云々

太子初科照耶片岡山歌詠返秘伝云

尸那於伊伝片岡山仁照夜人我仁会瀬婆絶留日母無

私記云出尸那聖雲山 片岡山佐曾良悲天等化乃夜照

我」二・オ

日絶事無也云々 一達磨返歌詠返云 岩乃岡我耶度我身

乃

絶波古曾加流教者乃御名婆和須連目 此又岩岡者常在

靈山乃心

伽耶 我身乃絶者古曾 加流大君御名忘目者伽耶天竺

ノ伽耶城也彼所

世界衆生 方便契諾乃義加流大君者観音、三十三身

各別利生名字

何事加輪須連無土云々」一二・ウ

注

\*1 この一行分は、後筆にて貼紙補写。

\*2 「法然」二字、貼紙補写。 \*3 「同院」、 \*4 「覚」、

\*5 「心弥」、 \*6 「一義」云、 \*7 「等通」、 \*8 「仍

仏」、いづれも貼紙補写。 \*9 「源」二字分の貼紙、下に

「持行」と墨書か。 \*10・\*11の二字分は貼紙あるのみ。

\*12 「昔周」は貼紙墨書。

慶応義塾図書館蔵 「室町後期」写 『上宮救世大

聖御伝』存巻下 大一冊

上宮救世大聖御伝下

十九才十一月七日太子深御出家ノ御志有御門崇

峻天皇ニ此由ヲ奏聞有ヘキヨシ思召サレシ間百済ヨリ

向カヘ給シ先生ノ御衣鉢道具等ヲサ、ケ皇居倉橋

ノ宮へ御参内アリ御舎弟丸子親王ヲ以テ事ノ由ヲ

御奏聞有キ天皇ユルシ給ハス藕我ノ大臣キサメ奉テ

申様御出家ノ事努<sup>ユメク</sup>〓<sup>不</sup>可有侍り先帝ノ御遺勅

ヲ承テ<sup>イヤシク</sup>苟モ〓太子ヲ守護シ奉 寸陰<sup>スシイ</sup>モヲコタ」一・オ

ラス然ニ先帝勅ノ曰ク太子ハ定テ御出家ノ志御セハ

朕崩<sup>チン</sup>ノ後ハ必ス御遁世<sup>トシセ</sup>ノ事ヲ思召給ヘシ相講<sup>アイカマヘテ</sup>汝<sup>チ</sup>補<sup>フ</sup>

翼トノキサメ奉テ努ク其儀アルヘカラスト念比ニ御遣  
勅有リ耳ノ底ニ止テ未<sup>タ</sup>スレ忘侍リトテキサメ給シカレハ今  
月十五日吉日良辰ナリヤカテ御元服有ヘシト定ラレシ  
カハ

太子本意ナラス思召ケレトモ御勅定ナレハ十月十五日  
御

元服アリ役ハ御舎兄丸子親王也左右ノ紙燭<sup>シソク</sup>ノ役ハ

小野大臣馬子大臣也其眈親王御涙ヲナカサセ給ケレハ  
太<sup>一</sup>ウ

子ノ御衣ニカ、リケリ太子是ヲアヤシミテトヒ給フ答  
テ

曰ク先帝ハ御歳十六ニテ御元服有ヘシト定メ御キ今マ  
テ

ヲソキ事ヲウラミ又ハ先帝御座アラハイカニ悦ヒ思召  
レント

アワレナリケレハカク御涙ニムセヒ侍リト曰ヘハ太子  
モ涙ニカ

キクレ給テケレハ月卿雲客皆袂<sup>タモト</sup>ヲシホリ侍ケリ

廿歳 廿一歳 廿二歳

推古天皇御即位大和小治田宮<sup>ヲハタノ</sup>ニ皇居<sup>キヨ</sup>アリ時ニ

天皇太子ニ曰ク我ハ女躰ナレハ太子<sup>〔今〕</sup>ヨリ政道ヲ<sup>ニ</sup>オ  
助<sup>タス</sup>ケ給ヘト念比ニ仰アリケレハ関白攝政ヲ兼給テ

天下ヲソヲサメ給太子天皇ニ奏メ曰ク国主タルハ慈悲

深重ニノ民ヲアワレムヲ賢王<sup>ケンワウセイシユ</sup>聖<sup>シユ</sup>主ト名ク国安カラス

臣ミタルム時ハ王ヲサメカタシ然ハ民ノ御ツキ物ヲト  
ムメ国

ノ濟物ヲユルシ給ハ、民安カルヘシト曰ヒケレハ三ケ  
年ノ間

国々ノ濟物ヲユルシ給フ然レハ万民千秋ノ哥ヲソウタ  
ヒ

ケル其哥ニ曰ク君ハ万歳マシマサン我等モ御カケニサ  
フラ

ハンツルト龜トハタハフレテ幸イ心ニマカセタリト仍  
テ王法<sup>ニ</sup>ウ



サカンニノ国土豊饒也

廿三歳 廿四歳 廿五歳

太子先生ノ御檀那百濟国王我ハ国王ナレハタヤスク

カナヒ難シトテ阿佐太子ト申ヲ御使トノ渡シ侍リキ竜

頭トウケキシユ鷓首ノ船ニノリテソ来ケル太子御対面タイメンアリケルニ阿

佐

太子四言九句ノ偈ヲ唱テ讚歎シ奉レリ合掌敬礼

救世大悲 観音菩薩 妙教流通 東方日国 四十九歳

伝燈演説 大慈大悲 敬礼菩薩 此偈ヲ□テ太子ヲ

三・オ

三度礼シ奉シニ太子ミケンヨリ光明ヲハナテ阿佐太子ノ

カウヘヲ照シ給フ其ノ光宮中及ヒ世界ヲ照ス人寄異ノ

思ヲ

ソナン奉ケリ

廿七歳 太子ノ襄祖ノウソノ大和国三輪明神へ御参アリ大臣

公卿供奉セラル三輪山ノフモトニ川アリ三輪川ト名ク

橋ノ

上ヲ御幸ナラセ給ニ橋ノ下ニ賤キ女人芹ヲツミ面ヲア

ケス

打歎ウチナケキテソイタリケル太子是ヲ御覧ノ御供ヲ以テ是ヲ

問給フ女左右ナク申ムネナシ又重テ彼女ヲ召テ子三・ウ

細ヲ尋ネ。給フ其時女申ケル我ハ此山ノフモトカシハ

テノ里ト云

所ニ貪賤ヒンセンノムスメ也我父母ヲ養ヤシナハンカ為ニ里ニマワリ

袖ヲヒラクト云ヘトモ一人モ給ス事ナシ此ユヘニ此川

ニ出テ

若菜ヲツンテ我父母ヲ養ト云ヘリ太子孝養ノ心ヲ

切ニ思召オホシメシテ太子曰ク我レ思子細アレハ我ト汝ト契ヲム

スヒ

侍ラント仰ラレシニ彼ノ女左右ナク承諾シヨウダクシ奉ラス太子

重テ

曰ク我与汝ト宿縁アリ仰ニシタカウヘシト曰ヘハ猶承ウケ

奉ス

其時太子ヲホシメシケル様ハ我国ハ神国ナレハ三十一  
字ノ」四・オ

コトノハニハタケキ物ノフモヤワラクタメシナレハト  
テ一首ノ

詠哥ヲソ下給

三輪川ノ清ナカレノス、シサニハヤクモヤトルソラ  
ノ月カナ

トアリケレハ御返事ニ

三輪川ノ清キナカレニスム月ノカケト、モニソ西へ  
入ラン

カ様ニ申ケレハ太子曰ク汝カ所へ御幸ナルヘシ我御座  
ニハ六ミヤクノ

豹ノ皮ヲシキヤモチノ桜ラニ手白ノキノ子ヲスヘシト  
仰アリテ

明神へ御参アリケリ其後カシハ手ノ里へ御幸ナラセ給  
」四・ウ

ケルニ誠ニ賤シキ藤ノ衣ヲ着シワラヲムスンテヲヒト

セリ

太子此カタチヲ御覽ノ御装束ノカサネノ絹ヲトネリニ  
モタセ侍リシヲタヒ給ケルサテ六ミヤクノ豹ノ皮トハ  
六フアミ

タルタウラコモノ事也ヤモチノサクラトハアカ米ノツ  
カサル飯

ナリテシロノキノ子ト云ハヤツハノ根ノ白キセリナリ  
太子三度

御手ヲノヘナテサセ給シカハタケニアマルヒスキノ御  
クシトナリス

ヤセヲトロヘ給ヘル御カホハセ忽ニ紅桃三千ノ花ノヨ  
ソヲヒト変シ

翠黛片月ノ妙ナルコヒヲソナヘ給ヘリ仍テセリヲツミ  
給シニ」五・オ

依テセリツミノ后トモ申又ハカシワテノ后トモ申奉ル  
抑彼后ハタ、人ニ非ス彼カシワテノ里ニ貧賤狐獨ノ夫  
婦アリ古ハ都ニ住ケル者ナリシカ事ノ縁ニ引サレ此山

里ニヲチフレテ侍リゲルアル時八月十五夜□クマナキ  
ニ

柴ノイヲリヨリ立出テ見レハ曇ナキ秋ノ月セイノト  
メ

千里ニ明ナリ 夫婦トモニナカメ心ヲスマシテ居タリ  
ケル時

円満タル明月ニ破テ一ツハ我家チカキヲトハ山ニヲ  
チ

カ、リケル此者不思議ノ事ニ思テ次ノ朝夕彼ノ所ヲ見  
「五・ウ

侍ケルニ歳三歳ハカリナル姫忽然トノ櫛ノ葉ヲ敷テ  
座ス此ヲキナヲ見テ手ヲアケテキタカレントス其時

ヲキナイカナル変化ノ者ナリトモ是程ニナツカシケニ  
思タル

事アウレニ思テ是ヲキタイテ家ニカヘル年月程ナク  
セイ長シテ三年ト申ニハ十五六ノ女ノ形ナリ天情柔

和ニノ孝養ノ心深シ父母是ヲ憑事不<sup>タノム</sup>浅門<sup>アサカラ</sup>々戸々ニ

食ヲモトメ山野ニ菜ヲタシナンテ病ノ父母ヲハコクム  
ト云々

太子臣下ニ曰ク我望忽ニ満足ス雖<sup>レ</sup>然今一ノ望アリ」  
六・オ

所謂ヨキ馬也諸国ニ<sup>リヤウ</sup>令<sup>シ</sup>旨ヲ下テ求<sup>ム</sup>之ヲヘシトテ尋  
ラレケレハ数一千疋引参タリ中ニモ甲斐ノ国司秦ノ

川勝カ進上シタル黒キ駒アリ太子是ヲ御覽ノ比ヲ  
召ヲカル此馬ハ信濃国井ノ上ヘノ牧ノ馬也此牧ニ黒キ

馬  
アリ東国アサマノタケヨリ竜馬クタリテ此雜馬ニトツ  
ク仍テ母モ黒毛ナリ此駒程ナク生長シテ天ヲカケ

ル応用アリアサマノタケヨリスルカノフシノス□<sup>シ</sup>ヘ虚  
空ヲ

カケリ昼夜ニ飛渡ル国民之ヲ国司ニ奏ス是ヲ聞テ「六・ウ  
イカニシテカ之ヲ取テ君ニ奉ヘキト思テハカリ事ヲ

カマヘシカトモ取事不能国司思様ハ天下ニ生ヲ受ル物  
誰

カ国王ノ命ヲ背ヤ然ニ今上儲君太子ノ令旨ヲ給テ

宣命ヲ竜馬ニ含ム爰ニ駒国司ノ前ニヒサヲオリテ

ヒレフス国司取レ之三長三短ニシテ穆王八駿ノ駒モカク

ヤト覚タリ此トネリニ成ヌヘキ者我朝ニ難レシ有トテ

百濟ヨリ渡リシ調使ト云者ヲトネリニ付ラレタリ今一

人ハ

川内国ミヤキケノカチシ丸ヲ付ラル太子天皇ニ申給ク

「七・オ

此駒ハ三千年ニ一度ケン王ノ御代ニ出現ス然ハ三月三

夜

御暇ヲ給日本國中ヲ拝見仕ラント存候トアリシカハ

御門事ユヘナク御ユルシアリ調使ヲ御共トメ水ツキニ

ヨク

取付ヘシトテ御馬ニメサレフチヲウテ虚空ニアカリ東

ヲ

指シテトヒ給駿河ノ国富士ノ峯ニ御馬ノ足サワリシカ

ハ此

峯ニ下リ給テセンチヤウノアリサマヲ御覽スルニ八方

ニ峯

タカク八葉開敷ノ形ヲアラハシ中心ニ清淨ノ宝池アリ

池ノ

片原ニ休息有テ池ノ面ヲ御覽シケレハイケニ波ノ文ア

リ「七・ウ

金色ノ光明ヲ放ツ良アテ阿ミタノ三尊化現ノ曰ク衆

生ヲ度センカ為ニ浅間ノ権現ト顯テ此山ノフモトニ地

獄ヲ

構ヘ受苦ノ衆生ヲ入シメ毎日三時ニ此地獄ヘ入テ罪業

ノ衆

生ヲ濟度シ侍リ御覽セラルヘシトテ三尊ト太子ト此池

ニ

入テ半時斗ハ見給ハス調使丸ハ奇異ノ思ヲ成ケル太子

水ノ上ニ浮ヒ出サセ給テ又御馬ニメサレ東ヲサシテア

キ田ノ

城ニ打下ラセ給テ未来ノ衆生ノ為ニトテ高キミネニ大

ナル

盤石アリ此上ニ御馬ヲ打ヲロサセ給テ石ノ上ニタ、セ

給竜馬」ハ・オ

ヒツメアトフカクシテ五寸ハカリフミ入テト、メ給ヘ

リツホノ石

フミトテ今ニ侍リカ様ニ日本国中ヲ御巡礼アリ熊野三

ノ

御山ナントマテ御参アテ権現ニ御内讚アリ伊勢太神宮

ニモ御参アテ三日三夜ニハ大和国ノ宮ニソ還御ナラセ

給ケリ

廿八才 廿九才 卅歳 此三ケ年ノ間ハ諸国ノ軍

兵ヲメシテ新羅 高麗 任那等ノ国ヲ打シタカヘ御調

物ヲ日本国ヘソメサレケリ

三十二歳 國中ノ人民男女老少一千人御教導アテ」ハ・ウ

出家受戒セシメ給フ

三十三歳 夏四月ハシメテ十七ケ条ノ憲法ヲ製

シテ天皇ニ奏シ王法ノ規模トシ政道ヲ勲ヒ律令格

式此ヨリ則チ起レリ

三十四歳 甲斐ノ黒駒ニメサレテ今度ハ廿日ノ間ニ陸

地ヲウチマワラセ給テ日本六十余州ニ国府寺ヲ建立シ

神社仏寺ニ田ヲノ寄附セラル造像起塔等専此年成也

三十五歳 御門太子ヲ請メ勝鬘經ヲ御講讚アルヘキ」

九・オ

ヨシ申サセ給シニ実ニ御本意ニ思食シカハヤカテヲワ

タノ

ミヤヲ庄嚴シテケツカイ清浄ノ道場トシ御講讚アリ

玉ノ御冠赤衣ニ御袈裟ヲ着シ七宝ノ師子ノ床ニ

座給フ八十種好ノヨソヲヒヲ現シ給フ金輪聖王八玉ノ

スタレヲカ、ケ竭仰ノタナ心ヲ合給フ后妃采女ハ花ノ

タモトヲ陣頭ニヒルカヘス堂上堂下同時ニ涙ヲ、サヘ

宮中

宮外ヒサヲマシヘテ聴聞ス梵唄虚空ニ引ケリ微妙

和雅ノ音声也人々寄特ノ思ヲ成セリ勅使ヲ立ラレ」

九・ウ

テ声<sup>コエ</sup>ノヲサマラン処ヲキ、テ参ヘシトテ尋ラレシニ宮  
ヲ去ル

事東二十余町ヲヘタテ、山ノフモトニ少池アリ此池ノ  
中

ヨリ声ヲ出スアヤシンテ池ノ面ヲ見ニ六月ノ事ナルニ  
ハスノ

ウキハニ少キ青色ノカエル此梵唄ヲソ引ケル此カエル  
ハ

只者ニ非ス達摩大師也或ハ第三日ニ及テハ天ヨリ三尺  
ノ蓮花南庭ニフリアツサ三尺ナリ橋樹寺ノ講堂ノ

前ニ太子身ツカラ石ノ壇<sup>ダン</sup>ヲツキ之ヲウツミ給ヘリ猶ノ  
コル

蓮葉ハ宝蔵ニ之ヲ納ラル又結願ノ日ハ宮ノ門前ノ

十・オ

山ノイタ、キニ尺迦多宝ヲ初メテ千仏ノ烏瑟<sup>ウシユツ</sup>顯現

シテ勝鬘<sup>セウモウ</sup>經ヲ証明シ金色ノ光明虚空ヲ照シ風栴

檀ノ匂ヲ送ル何ソ靈山ノ古ヲ求<sup>モトメ</sup>中天竺<sup>チン</sup>淨刹ノ

ヨソヲヒヲ尋<sup>ヒ</sup>界外土<sup>カイガイ</sup>ニ哉

三十六歳 太子天皇ニ奏シ給我過去六生ノ間震旦

江州衡山ニ修行セシ時長時ニ誦奉シ小字ノ法花經

其外十八種ノ道具等ヲ我国ヘムカヘ渡サント思召ヨシ

奏シ給ケリ御使ニハキモコノ大臣ヲ定ラル先彼国ヘ至

ル」十・ウ

道ノ程ハ蒼波ヲ西ニヘタテ、海路万里也サテ江州ノ津

ヨリ衡山ノ間二千八百三十里也彼峯ニ五ノ高峯アリ

紫蓋般若解脱恵日花蓋是也其中ニ我住セシ処

ハ般若ノ峯円通院ノ内般若臺ト云草庵也松木ニテ

作シ間松室ト名其室ニハ我先生ノ南岳大師ノ御影

ヲカゲタリ其カタワラニ又一ノ草庵アリ是ヲハカツラ

ノ木ニテ

作シ。依<sup>ニ</sup>テ佳室<sup>ケイシツ</sup>ト名我彼所ニ化導一生ノ第子僧俗<sup>キチアツ</sup>一万

五

千人アリキ遷化シテ我朝ニ誕生スル事今年三十七年也

」一一・オ

其間彼弟子等年々生々ニ逝去シテ今老僧三人ノコ

レリ此三人ノ老僧ハ我在生ノトキ懇ニ申ヲキ侍リ我東

海国ニ誕生ノ彼国ニ仏法ヲ弘メ衆生ヲ利益スヘシ受

生以後卅七年ト云時此持経等ヲ取ニ遣ヘシ其マテ相

待我使者ニ渡侍ルヘント約束セリ（更ニカ）早々彼所へ行テ

上件ノ物共ヲ持来スヘント委細ニ仰フクメラレシカハ

小

野大臣辞退ニ不及已ニ四月上旬ニ鎮西ハカタノ津ニ

下向ス彼三人ノ老僧ノ方ヘ法服三具ト、ノヘ遣ハサル

漫々」二・ウ

タル海上ニトモツナヲトヒテ望ヲ江州ノ津ニカケケン

ノタル

煙濤（ヒシタウ）サヲサシテ思ヲ般若ノ峯ニ 七日七夜ニ

江州ノ津ニ着岸ス則江州ノ国王ニ此由ヲ奏聞ヲヘ

シニ国王ノ使ニ相副テ衡山ヘ送ラル小野大臣ハ上下

数十キニテ彼山ノフモトニキタリヌハルノ山路（セウ）松

栢

シンノトシテ枝ヲツラネ苔石セキノトメ道ニ立般

若ノ

峯ソヒエ恵日ノ禅洞（トウ）ヲホロ也円通院ニソ至リヌ事

ノ旨趣ヲノヘサルニ小沙弥出テ大臣ヲ見テ云我先師」

二・オ

念禅法師ノ使来リト悦テ老比丘ニ告ク三人ノ僧ニ

和言通シ難キ間指ヲ以テキサコニカキノヘテ太子ノ御

書并ニ法服等ヲ渡奉ル時ニ三人ノ老比丘是ヲ見

則地ニタウレテカナシミテ云クアワレナル哉我大師遷

化

ノ後ネンコロニツケケキヤクシ御キワレ遷化ノ後ハ更

ニ東

海国ニ至テ彼国王ノ太子ト生テ衆生ヲ利益シ如来

ノ遺教（ユイケウ）ヲ起スヘシセンケ以後卅七年ヲ経テ使ヲツカワ

スヘシ

其時我持経八卷一軸ノ法花経其外道具等是ヲ」二・ウ

送り遣スヘシ其マテ汝千寿命ヲタモチテ相待ヘシ

ト此遺言タカフ事ナク送ヘシト仰ラレシカハ今年巳ニ

卅

七年ニ相当レリカナシキ哉ヤ蜉蝣ノ命キエスシテ今

二タヒ本師後生ノ恩札ヲ拜奉ル事ヨトテ三人ノ老

比丘音ヲ立テ悲泣ス小野大臣モ此コトハリヲ聞キ

共ニ涙ニムセヒケル寺中ニ入テ般若タキニ至リ又旧

跡ヲ拜見スルニ新儀ヲ見奉ルカ如シ毎事示給シ□

少モタカウ事ナシ彼御持經道具等ハ石室ニ納メラレ

一三・オ

ケルヲ取出遺唐使小野ノ大臣ニ員數ノ如クワタシヌ

院中ノ僧侶ナコリヲ、シミ一千余人一面ニ立テ香ヲ

タキ花ヲ散メ小野大臣ヲ拜シ奉ル殊ニ三人ノ老僧

名残ヲ、シミ門前マテ立出テ賤別ヲカナシミテ紅

涙ヲナカスナケヒテ云我等サカンノ歳ナラマシカハ君

ト

同帰舟ニウツリテ東土ニ渡ナン余命イクハクナラス然

間万里ノ波濤ヲヘタテ、ノソミヲ五カクノ旧室ニ止メ

タリ

悲哉ヤ哀ナルカナヤトナケキケルニ実ニアワレナル有

様也」一三・ウ

大臣已上寺門ヲ出テ江州ノ津ヘムカワレケル江州国王

ノ

玉ハクサシモ此国ニテ興法利生辱ク大権聖者ニテ

御キ又東土ノ利生大慈大悲ナツガシク侍ヘリトテ調使

十八人ヲト、ノヘテ小野大臣ト同船シテ日本国ノ皇

太子ヘ遣ハサレケリ同年八月上旬我朝ハカタノ津ニ

着ス大臣持来スル処ノ物共三人ノ老比丘ノ御返事ヲ

太子ニ捧ク御持經ノ法華經大聖如意輪像一鋪積

迦一鋪肉色ノ釈尊ノ仏舍利七粒センタンノ月ハタノ

一四・オ

脇息玳珀ノ念珠珊瑚ノ御ハチ建陀羅鼓ノ御袈

裟金玉ノ鬚尾犀角ノ白松子等悉ク是ヲ送進□

太子曰ク悦ノ中ニ一ノ憂アリ此法花經ハ我持經ニ非ス

我第子ノ僧ノ持經也イマタヒホヲトキテ拜見シ給ハサ



ル

ニ諸人ニツケテノ給ク此經ハ我弟子睡眠比丘ト云シ僧ノ

持經ナリ其故ハ彼僧常ニ睡眠ニヲカサレテ火ノホトリ

ニテ此經ヲ誦讀セシ程ニトヒ火ニ經ノ二字ヲ焼ケリ

四ノ卷五百品ノ長。行ト偈頌トニ二所アリト仰ラレテ

開」一四・ウ

御覽スルニ少シモタカワス長行偈頌ニ二字焼失ス左

右ノ近習不思議ノ思ヲナス彼比丘ノ御返事云何ナル御

深意ニヤヤカテ火ニ入給其後太子夢殿ニ入テ七日七

夜ヲ經テ我真実ノ御持經ノ本ヲ取給フ此殿ノ近邊

ニシテ音ヲタテス守護シ奉ルヘシトテ今法隆寺ノ

川原ニ八角ノ円堂夢殿ニ入テ自戸ヒラフトチ七日

七夜入定シサテ七日ヲ經テ内ヨリ出給沈檀ニホヒ

苟。光明天中ニカ、ヤケリ八卷一軸ノ御經忽然ト」

一五・オ

シテマシマス

三十七歳 去年江州ノ国王ヨリ遣サレシ朝使十八

人ヲ返サレケル小野大臣又同江州へ渡ケリ是ハ私ノ

志也去年面謁トケシ三人ノ老比丘等ノ行ヘヲホツカナ

ク

思テ今一度向顔ヲトケント云志ニヨテ同朝使ト彼ニ渡

ル

程ナク衡山ニ至テ纔一人ニ遇ヒ侍リ比丘大臣ヲ見テ

涙ヲ流シ愁歎シケリ干時大臣問曰ク抑去年

面悦ノ今二人ハト問侍レハ答曰ク其事ニ侍リ去年」

一五・ウ

販国ノ後幾程ナク二人ノ僧逝去セリ我レ一人猶存セリ

二度面拝ヲトクル事生前ノ悦ナリ唯シ一ノ不覺アリ

是ニ侍リシ小沙弥アママテ御持經ヲ取チカヘ御弟子ノ

經ヲワタシ奉リ侍然ルニ去年八月下旬ノ比太子青竜

ノ車ニメサレ紫雲ニノリテ四大天王玉ノハタヲ指アケ

天童白蓋ヲオ、中虚空ヲ飛テ来侍リ石室ニ入テ

彼御持經ヲ取テ還御ナラセ給キトツク時ニ大臣思

合ルニ七日夢殿ニノ入定シ給シ其時分ニ相当レリト」

一六・オ

共ニ感歎シケリ大臣已ニ日本へ皈ラレシニ一人ノ老比

丘

実ニナコリヲ、シミテ門前ニ立出テク、リケル大臣ノ袖ヲヒカヘテ云ク我今寿限ツキナントス命シナハ東海国ニムマレテ太子ノ御ヤツコトナルヘシト我名ハ念正比丘

ナリトテ門前ノ石上ニ登リ坐具ヲノヘ香ヲタキ東ニ向ヒ端座合掌シテナムルカ如クシテ早ニ太子此由聞

召御ナミタニムセヒ給キ云々

三十八歳 カツラ野ノ御行此時也広隆寺」一六・ウ

伽藍ヲ立ラル

三十九歳 百濟ヨリ伶人三十六人ヲ召ワタサレ秦

ノ川勝舎弟時勝カ子孫ニ此舞ヲ習セラル日

本国ノ舞樂此ヨリ始ル

四十歳 推古天皇大和国兔田野ニ出サセ給テ御

カリアリシ。太子天皇ニ奏シ給ハク殺生ハ是罪業ノ

元娘生死ヲ引源也此御カリヲ止ラレ候ヘキヨシ申給シ

□ヨリ。国王ノ御狩是ヨリト、メラル」一七・オ

四十二歳百濟ヨリ渡シ巧匠等ヲ召具シテ河内ノ

国磯長ノ里へ御行ナラセ給テ我御陵ヲツキコシラへ

サセ給中五年ニ終ニ巧ヲヲへ給其陵ノアリ様ハ中ニハ

四方ニ大盤石ヲキリ立テ内ハ平地ナルヘシミサ、キマ

ワリヲ

ハ大路ニツクリテミサ、キヲ四方ノ山ニツ、クル事ナ

カレ葬

礼ノ時ノ大行道ノ為也又ハ太子ノ御苗孫ヲ彼代ニ

相続スヘカラサル表示也ト云ヘリ太子大和国イカルカ

ノ

宮ニ還御ナラセ給ケル時カタヲカノ山路ニテカキノ黒

駒」一七・ウ

アラシヲフキ足ヲアカヒテ先ニス、ム事ナシ太子アヤ

シミ御覽スルニ道ノホトリニ。飢。饑。疲。瘦ノ乞人。平

〇臥カクワ

セリソノカタチヲ見ニ面容長大ニシテ眼ニ異光イ

アリ沙門ノカタチタリ 太子是ヲ御覽シテ兎ト

角ノ御問答ニ及ハス一首ノ哥ヲ賜

シナテルヤ片岡山ノ飯ニウヘテフセルタヒ、トアワ

レヲヤナシ

ト仰ラレシカハ彼乞人御返事ニ云

牛カルカヤトミノヲ川ノタエハコソ我ヲホキミノミ

ナハワスレメ一八・オ

此御返事申テ後此乞人ヤカテムナシクナリヌ太子

御涙ニムセヒ御トネリヲ以メサレタリケル赤衣ヲヌキ

テ

彼死人ノ上ニヲ、ウヘントテカケラレテ還御ナリ給ケ

リ

次ノ日御使ヲツカワサレケルニ太子ノヌキ、セサセ給

シ御

赤衣ハカリアリテ死人ハナカリキ唯シクツノカタシ

ヲノコセリ御使是ヲ以テ太子ニタテマツル太子是ヲ

御覽スルニ悲泣シテ歎徳シ侍キ此乞人トハ達摩房也

太子衝山ニ修行シ御シ時西方ヨリ化来ノ禪師ヲ勸メ

一八・ウ

奉テ東土ノ衆生ヲ濟度シ給ヘキヨシ御契約アリテ

達摩大師ハ太子誕生廿年以前ニ日本ニ来給シ太子誕生

ノ日ハアシケノ馬ト変ノサキシヨ誕生ヲ悦ヒ勝鬘講讚

ノ時ハ又蝦蟆トナテ梵カハク。唄カハク。ノコエヲアケテ称揚会場ヲ

助ケ給然ニ太子御誕生ニ歳中春ヨリ法ノ名字ヲ

唱ヘテ此土ノ衆生ニ聞法結縁セシメ大小権実ノ教

法四十二歳ノ中ニ盛也サカリ雖然達摩大師己身中ノ法

文教外別伝不立文字ノ器根未熟不能ニ此法ヲ興一九・オ

只月ヲ指ユヒヲマホリテキマタ拈花微笑ノ口ヒル

ヲシラス上々智觀ノ機根ニウヘテ飢羸疲瘵ノ

カタチヲ示ス此時太子ノ御詠達摩ノ返事トモニ深

義ヲ述徃因ヲ答給ヘリ口伝秘決ニ云々

四十八歳河内国シナカノ御廟ヘウ五ケ年ニ造功ヲハリ

シカハ其時太子御廟囉洞ニ入テ西方ノ立石ニ偈ヲ

シルシ御ス其願文ニ云

大慈大悲本誓願 愍念衆生如一子」一九・ウ

是故方便從西方 誕生片州興正法

我身救世觀世音 定惠契女大勢至

生育我身大悲母 西方教主旃陀尊

真如真實本一躰 一躰現三同一躰

片域化縁亦已尽 還皈西方我浄土

為度末世諸衆生 父母所生血肉身

遺留勝地此廟囉 三骨一廟三尊位

過去七仏法輪所 大乘相應功德地」二〇・オ

一度参詣離惡趣 決定往生極樂界

如此石ノカヘニカキシルサシメ給テ還御ナラセ給ニケ

リ御

悲母ハ間人穴穂部ノ皇女御后ハセリツミノ后我御身三

所ミナ是ツキテノ如ク觀音勢至弥陁ノ三尊ト申

事誰カ成レ疑哉 又天下ニ不思議ノ瑞相現ス一ノ天

變アテ東ヨリ西ヲサシテ虚空ヲ飛フ其形チ

刀ノ如クアカキ色ナリ動揺天ヲヒ、カシ虚空ヲカ、ヤ

カス

時ニ百濟ヨリ渡ル天文博士道吟ト云モノ太子ニ申様」

二〇・ウ

此變異 崑由箕ト云天變也。大国ニ昔シ聖人ホロヒン

ト

テ此瑞ヲ現ス太子今一兩年ノ中ニハ此国ノ縁ツキ

給テ御子孫ハ五六ケ年ノ程ニ皆ウセサセ給ヘシト云

此年太子三十人ノ伶人ヲ以テ太子ノ宮ニ御賀

ノ節会ヲ取リヲコナヒ給事三ヶ月キセン上下御

ユルサレヲ蒙テ五キ七道宮ニ参太子ヲ拜シ奉レ

リ是モ生身ノ御形ヲ見ヘサセ給テ衆生ニ縁ヲ

結ハントノ御方便也」二一・オ

四十九歳此御年既ニ太子御入滅アリキ后妃

菜女ヲハシメ近習ノ大臣以下ナケキカナシミ給事

ナノメナラス然ニヤ、ヒサシクアテ又蘊生シマシク

テ

曰ク我此世ヲ去事ステニカキリ也ト云ヘトモ后キサキアマ

リニ悲泣シ給ツル御コエ耳ノ底ニ聞ヘテ臨終ノサハリ  
トナリヌレハ又ソクセイ獲生セリ今三ケ年ヲ経テ五十二ニ

□シテ入滅スヘシアイカマヘテ誰モ臨終ノミキリニラ  
ンアキノ者ヲチカツクル事ナカレ末世ノ衆生コトニ臨終  
ノ「二一・ウ

亡念マツ忘習ヲト、メスハ往生ノサワリナルヘント云々

五十二歳二月廿二日ノ夜半太子セリツミノ后ト

アシカキノ宮ニシテ太子申サセ給様コヨヒハ后ト共ニ  
入

滅スヘシ時分到来セリト仰ラレシカハ后申サセ給様

我最後ニトミノ井ノ水ヲメスヘント申サセ給シニ太子

御哥

ケガレタル富ノ井ノ水ナニカセン八功德池ニトクイ

タラハヤ

后御返事「二二・オ

ヨシサラハ五濁ノ水ハノマストモイソキテ行ム弥施

ノ御国へ

サテ二月廿二日后ト同時ニ御入滅アリケレハ宮中ニ哀

動ノ声ヲアケ一天ニ悲泣ノ涙ヲナカシキ山河大地モ

カナシミノ声ヲナシ草木樹林モウレヘノ色ヲフクミ

ケリアシカキノ宮忽ニ双林ノ風ノ音ヲウツセリ

サテ五里ノ山路陵マテ人クヒスヲツキ満チミテリ

甲斐黒駒ヲハ調使丸之ヲヒキ御前ニ行黒駒御棺ヲ

カヘリミカナシミノ声ヲアケシキリニイハエケリ其時

黒駒「二二・ウ

モ種々ノ神変ヲ現メタヒノ遮ニシテワリヌ此馬

馬頭観音ナリト云々調使丸ハ出家シテ御廟ノ前ニ

七日念仏座サセン禪ノ二月廿九日ニツイニヲハリヌ

太子御入滅六年ニ大臣ノ子入鹿ノ大臣生得ト身ニ

キセイヲソナヘケリサウ人アテ云ク此仁只人ニ非ス国

ノ

位ヲウハウヘキ相アリト云ヘリ此語ヲ信シテ位ヲソ

ミ

ケル太子ノ王子タチ国ニ御サハ王位ニソナハリ給ナハ  
アソ

カリナン先彼王子達ヲウシナキタテマツラント思テ

二三・オ

太子ノ皇子十七人御孫八。彼是廿五人ノ皇子ヲ宮ニ

入奉リテ焼ヤキコロサントシケリ一ノ御舎ヲ、ス兄大兄皇子

ハカリ事ヲ以テ舊骨ヲ宮中ニチラシヨキテ廿五人

ノ皇子ヲ引クシテシノヒテ御出ナテ夜半ニキコマ山ニ

ニケカクレサセ給ニケリキルカノ大臣ハ宮ヲ焼キ後ニ

アトヲミレハ白骨ハキノ中ニアリカクレテ山中ニ五ケ

日

マテ御テ又申サセ給ケルハ我等センソノ罪業ニ依テ

今此セメヲ蒙レリ是修因感果ノコトハリナレハナケク

二三・ウ

ヘキニ非ス同ハ我等カ父ノ太子ノ御建立ノ法隆寺ニ

マイリテ彼所ニテ父ノ菩提ヲモトフラキ奉リキカニモ

成

ヘシトテ廿五人相共ニ法隆寺へ入セ給ヌ五重ノ宝塔

ニノホリ各々香炉ヲ取テ焼香シ西方ニ向テ唱テ

曰ク願ハ我父ノ太子上宮王託生シ御ス西方極樂世界ニ

往生セン三世ノ諸仏護念ヲ加テ来迎シ給ヘシト礼拝シ

給ケリ香ノケフリ紫雲ト成リ忽ニ廿五ノ菩薩ト

成テ西方ヲ指テ飛給フ」二四・オ

(白紙)」二四・ウ

舍利礼

一心頂礼 万徳円満 釈迦如来 心身舍利

本地法身 法界塔婆 我等礼敬 以我現身

入我我入 仏加持故 我証菩提 為仏神力

利益衆生 発菩提心 修菩薩行 同入円寂

平等大智 今將頂礼」二五・オ